

## ◎ 連合会だより

労働者協同組合とはなにか、今年度は改めてこのことを問い直している、または問い直さざるを得ない状況が生まれてきているのが全国的状況であると思います。総会、トップセミナー、拠点労働者協同組合会議と連なるとりくみの中心点が、「労働者協同組合になりきる」ということにあり、その極めつけが東京の高齢者協同組合の設立総会に示されたように思います。

「全組合員経営がないと高齢者協同組合はできない、自由な組織というのは本当にいい、ボランティアで参加した高齢者だけではなく、若者が頑張っていてそこで確実に成長していることが本当にうれしい。」準備の中心を担ってきたセンターの田中羊子東京本部事務局長の感想は、準備の過程での豊かな事実によって裏付けられているだけに重いものがあります。協同組合というのは、楽しく豊かなものであり、ほとぼしる人間性が遺憾なく

発揮されるどころだと思いますが、東京にその姿を見る気がします。そして、あらためて思うのは、雇用シンポといい、協同集会といい、われわれの労働者協同組合のとりくみは、運動的な広がりをつくりながらその広い人と人との出会いと賛同を糧としながら進んで来たのだということです。

さらに、ヘルパー（ケアワーカー）の全国交流会が全国のケアワーカー自身の手で準備されていますが、この会議では労協のケアワーカーについて実践部隊が高齢者協同組合の運動と賛同の前進の中で討議をするということで、労働者協同組合とはなにかということが深められることと思います。農業でのとりくみの前進といい、労働者協同組合法の議論の広がりといい、運動のひろがりが高齢者協同組合への賛同と事業をつくることになっていくと思います。

鍛谷 宗孝（労協連合会・専務理事）

## ◎ センター事業団だより

あつと言う間の秋空が、台風14号の通過と共に訪れ、昨日は中秋の満月。政治の世界では衆院が解散され、総選挙がやってきた。プロ野球もいよいよ大詰め。本部の中でも熱くなる人が出始めている。惜しまれつつ「山口百恵的」引退を表明したテニスの伊達公子選手。夏の暑さが去り、過ごしやすくなったと同時に、世間もバタバタと動き出した感じである。

9/14の東京高齢協の創立総会は、雨にも負けず、風にも負けず1200人の人波。その数もさることながら、会場を包んだ雰囲気は驚かされた。これまでの各地の高齢協の設立とも、我々の総代会や色々な会議とも違う。そう思いながら何とも言えない感動とこれからに向けての緊張に苛まれる日々を過ごす中、ふと昨年のICA100周年記念大会のオープニング風景が蘇ってきた。舞台にはICAの歴史を支えてきた老男女が、にこやかにただ椅子に座っているだけの光景。何とも言えぬ穏やかで広々として厳かな顔々が、各人とICA

の歴史の重み・深みを醸し出していた。そう、東京の創立総会で舞台に並んだ地域で準備を進めてきた面々の顔と光景がそっくりだと感じたのだ。テーブルもなく椅子に座っている姿。創立準備を「自分の思い」を頼りにやり抜いた自信、その後ろにある無二の人生、そして今、同時代の瞬間を多くの人々と共有しているという喜び…。「自らが」という自信と誇り、様々な山谷を超え今があるという「歩み」。こうした先人たちの個が共通の未来に向かい「集い」、見えざる「心の交流」に「生」を感じながら発せられている光が織りなす雰囲気だったのだろう。「協同」に新たな意味深さを教えられたような気がする。東京の全ての仲間への感謝と、これが全国へ広がると誓いながら、再起動の本格化を期したい。まもなく代表者会議、協同集会。明日への感動とエネルギーを醸し出すと共に、そこまでの苦労を人生に刻みながら、心豊かな秋へ。

古村 伸宏（労協センター事業団・事務局長）